
メンタライジングの視点による 臨床的面接

We－モードと認識的信頼による関係的参照

上地雄一郎著

遠見書房, A5判 232頁, 3,520円, 2026年2月刊

(国際基督教大学) 西村 馨

本書は、MBT（メンタライゼーションに基づく治療）およびメンタライジング・アプローチ（メンタライジングの視点による臨床的介入）による臨床的面接に関する最新の非常に丁寧なガイドブックである。MBTは、BPD治療のために愛着理論を取り入れた精神分析的精神療法の一種として始まったが、創始者の一人Peter Fonagyの天賦の才によって、認知科学、神経科学、哲学などの最新知見が次々と導入され、しかも現在もなお理論的更新が続いている。本書の副題にある「We－モード」「認識的信頼」「関係的参照」は、精神療法の領域では見かけない言葉である。評者は2019年にFonagyとAnthony Batemanによる日本初のMBT 3日間ベーシックトレーニングを受講したが、これらの用語が重要語として論じられるようになったのは、その後数年の間である。すでに重要な理論書が数多刊行されていたが、この上どれだけ学び続けねばならないのか、と仲間内では大きなよめきが生じた。だが上地さん（私たちの間柄ではそう呼ぶことになっている）は、そういうときにむしろ理解への意欲が高まるらしい。

上地さんは、日本におけるMBTの導入と普及における最重要人物の一人である。MBTについて勉強しようとした者は、まず間違いなく上地さん関連の本にどこかで触れているだろう。評者も、そのよ

うな学恩に浴した一人である。単に翻訳をした、教科書を書いたというのではなく、彼による説明が非常に緻密、詳細、かつ具体的であるために、難解な概念や理論に満ちたMBTを理解する際に大いに助けられるのである。

上地さんは、アンナ・フロイト（旧アンナ・フロイトセンター）による成人のMBTトレーニングの日本での実行委員長を務める中で、Batemanと綿密な打ち合わせをし、問いを投げかけ、理解を確かめ続けた。また、実践で、患者・クライアントと歩む方法を探ろうとして苦闘しながら、Batemanからスーパービジョンを受け、そこで議論された理念を実践の中でembodyしていった。そのような軌跡が、本書の随所に見て取れる。「特異的治療法」としてのMBTの詳細な説明にとどまらず、「メンタライジングの視点による臨床的面接」の広がりや可能性を感じられる。例示される事例も多様で、MBTの十八番BPD患者のみならず、より広くさまざまなクライアントが登場し、「母親面接への覚え書き」までである。逐語録形式の事例提示はメンタライジング臨床の具体像の理解を助けてくれる。総じて本書は、日々直面するさまざまな行き詰まりをメンタライジングの視点から理解し、突破するカギを提供してくれるだろう。「難しい」事例であっても、地に足の着いたやりとりをすることの意義を再認識させてくれる。

改めて副題の3用語の意義について振り返ると、それらはいずれも対人関係や社会と関連しており、最新MBTの関心が、愛着という「戻る場所への思い」を超えて、他者を信頼し、社会に繋がっていく治療的やりとりにあることを示しているのだと考えられる。

上地さんありがとう。